

日本に新風吹き込む 2人の“教育起業家”

元マッキンゼーのコンサルタントと、外資金融出身の国際援助のプロ。
2人の教育起業家が実現を目指す、新たな教育の形とは？

ジャーナリスト ● 佐藤留美



炭谷氏は、神戸情報大学院大学の学長も務めている

スチャームの真つ最中。中学生は、広間でアーチェリー作りに励んでいる子もいれば、ウッドデッキで数学を勉強している子もいる。この学校には、日本語、算数（中学生は数学）、英語など一般科目のほかに、「テーマ学習」とことんプロジェクト「マイ・スタディー」など耳慣れない科目がある。

自ら学ぶ力を育てる――「探求型教育」がモットーのLGSを設立したのは、1996年にさかのぼる。きっかけは、92年にマッキンゼーのデンマークオフィスに赴任したこと。当時2歳の長女を現地の幼稚園に通わせたが、周囲の子とほとんどしゃべれない。心配する炭谷氏に、先生は「この子は観察力が優れている」とむしろ評価してくれた。

「私もしゃべれない子だったので、『しゃべれ！』と強制されてかえってしゃべれなくなっただけ

に、感銘を受けました」

その後、長女は自然と話すようになり、語学や生物、音楽など多方面に興味を寄せる意欲的な子になった。すべての子どもには好奇心がある。応援してやれば、子どもは自らやりたいことを見つけると、身にしみてわかった。2年後に帰国。ところが日本では、個を尊重し、やる気を引き出す小学校が見つからない。「だったら、自分の子どもを入れたい学校を自らつくろうと思った」

スパッとマッキンゼーを退社。地元神戸に戻り、最初は自宅の一室を使った、小学生向けアフタースクールとしてスタート。98年には、自己資金を投入し六甲のロッジを買い上げ、小中学生を対象としたフルタイムのスクールを開校した。

自立（律）性と主体性を育むため、先生から生徒への一方的な授業はない。苦手意識を持たせないため、テストもなし。第一、ここでは先生を先生とは呼ばない。生徒の主体的な学びを支援する「ナビゲーター」と呼ぶ。どんなときも歯を食いしばって続けられるモノを見つけては、「強い動機」が必要という考えから、授業も、学ぶ動機＝意欲を導き出す趣向が凝らされる。

前出の「ことんプロジェクト」では、その名のとおり主体的にやりたいことをとことんやる。「テーマ



LGSの運動会の様子。炭谷氏の願いは「一人ひとりが主体的にいきいきと生きること」

LGSを開校して今年で15年。1期生の3人は、全員大学生になった。一人は、その道では有名な大学生プログラマーに。19歳にして大学サークル組織をまとめるリーダーになった卒業生もいる。ちなみに3人は皆、一流大学に進学した。

「私は日本の未来を悲観していません。今は、おカネやポストを与えて人の意欲を引き出す時期から、自分を動機づけて意欲を高める時期への過渡期にある。後者の方向性が固まれば、日本はアジアを牽引するリーダーになれると信じています」

軽井沢で和魂洋才のリーダーをつくる

軽井沢にアジアのリーダーを養成する全寮制高校をつくる――。13年開校予定の日本初の全寮制インターナショナルスクール「軽井沢インターナショナルスクール・オブ・アジア（仮称）」設立準備財団の代表理事



アジア発のリーダー育成を目指す小林氏

事・小林りん氏も、異業種からの参入組だ。キャリア開始は、モルガン・スタンレー投資銀行部から。不動産ファンドの運営などに携わった後、ネット卸・ラクーンズの役員となり、同社をマザーズ市場に導く。

ただ、最終的な目的は、「自分の意欲や幸運を、人のため途上国のために使う」ことだと決めていた。カナダの全寮制高校に留学した10代の経験が、そのきっかけだ。

「100カ国以上から集まった生徒の中には、スラムのような環境から奨学金を受けて来た人たちもいた。彼ら彼女らは当時からすでに国の志の高さに影響されました」

世界レベルの能力のすこみにも打ちのめされた。留学前、日本ではオール5の優等生。部活では主将。学級委員かつ生徒会長で、いっばしのリーダーのつもりでいた。だが、「留学先では、10カ国語以上しゃべれるうえに、即興でピアノが弾けるなんて人はザラ。あまりの自分のふがいなさに、毎日泣いていました」

学習」では、たとえば「エネルギー」などをテーマに、グループワークで解を見つけていく。「マイ・スタディー」では、算数や漢字の書き取りなどを、ナビゲーターとやり取りしながら、自らのペースで学んでいく。特徴的なのは、多くの科目で学期末に「発表」があることだ。

スクール名に「グローバル」を冠しているが、英語やITスキルばかりを強化しているわけではない。「英語もITも大切ですが、それらは手段にすぎない。それよりも、何のための勉強なのか、自分はどうな人間になって世に貢献したいのか、のほう重要。その意欲が弱っているからこそ、日本は今、元気なアジアに負けているのです」

「英語もITも大切ですが、それらは手段にすぎない。それよりも、何のための勉強なのか、自分はどうな人間になって世に貢献したいのか、のほう重要。その意欲が弱っているからこそ、日本は今、元気なアジアに負けているのです」



小林氏の財団は、昨年サマースクールを開催。日本とアジアから34人が軽井沢に集った

教育の妙味を取り入れつつ、日本ならではの持ち味を生かした、いわば和魂洋才のスタイルだ。

カリキュラムは国際バカロレアを採用するが、それに加え、右脳と左脳を組み合わせたデザイン思考、脳科学や心理学の研究成果を生かしたリーダーシッププログラムなどを用意。さらには、おもてなしや、思いやりの文化など、「和の精神」も学ぶラインナップだという。

小林氏がこだわったのは「生徒の多様性」。フィリピン、ミャンマー、タイ、ネパール、チベットなどの全寮制学校と連携し、優秀でハングリな生徒を奨学生として招く。「各国のリーダー候補と呼ぶにふさわしいレベルの少年少女ばかり。彼ら彼女らと、同じ釜の飯を食べることで、日本人の生徒もい刺激を受け、成長の契機にしてほしい」